

松木 静泉（まつき・せいせん）

1、プロフィール

弘前市に生まれる。京都帝大の法科と国文科を卒業。潮音社同人として活躍した。歌人としてはもとより、国文学者として将来を嘱望されたが、病にて早世した。

<生没>

1904(明治 37)年8月 15 日 ~ 1934(昭和9)年1月3日

<代表作>

遺歌集『風露』

<青森との関わり>

弘前市松森町に生まれる。大学生活の6年間を京都ですごす。帰郷後に病を得、若くして亡くなる。

2、作家解説

歌人。明治 37 年、松木淳一の次男(長男は早世)として弘前市松森町に生まれたが、間もなく母病死、叔母が継母となる。松木家は藩政時代からの酒造家で、父は俳号を星陵といい河東碧梧桐系の有力な俳人でもあった。明治 40 年に碧梧桐が東北地方行脚の途次、松木家に 10 日ほど滞在している。

静泉は父の影響もあって文学をよくし、中学時代に「流転」「羅漢柏」など地方短歌会に参加し、「潮音」に入社した。旧制高校在学中に同社特別社友に推された。

大正 15 年、父の意見にしたがって京都帝大法科に進学したが、在学中に家業を継ぐ予定の弟とつづいて父が死亡し、家業を継がねばならぬ運命となる。昭和 4 年、法科卒業後に国文科に入学。吉沢義則教授にその才能を高くかわれた。後年、吉沢教授はその才を惜しんで、『新古今和歌集』(改造文庫)の校注を任せられている。

京都帝大在学中に潮音社同人に推され、短歌とともに「詩歌における思想」などのエッセイを同誌上に発表して注目された。幹部社友として将来を大いに囑望された静泉は、昭和7年に数え年 29 歳をもって大学を卒業し、帰郷した。

帰郷後は酒造店代表として家業に携わるかたわら短歌を作ったが、同7年から8年にかけての作品は独自の世界をひらき、「潮音」誌上でも異彩を放った。特に、東北地方を襲った凶作を詠んだ「世の飢」は反響をよんだ。同8年4月急性腹膜炎で1ヶ月入院した後も、不調をおして家業と『新古今和歌集』の校注に力を注いだ。同書が 10 月に出版後吉沢博士に招かれて京都に向かった。途中で太田水穂と四賀光子夫妻に、京都・大阪では吉沢博士と友人らに会ったが、病氣再発。翌9年1月、入院先の大阪赤十字病院にて他界した。

没後、「弘前新聞」と「潮音」は追悼号を出し、「潮音」は遺歌集『風露』を出版して哀悼の情を表した。

3、資料紹介

○歌集『風露』

図書

1934(昭和9)年 12 月 23 日

190mm × 140mm

静泉没後に、潮音社より発行された遺歌集。大正 10 年から昭和8年までの歌および、太田水穂の「松木静泉を悼む」などの文章をまとめた「静泉追悼記」よりなる。表題は、「萱すすき風露の秋のかけ澄めばころはほそし笛のごとくに」の歌による。